戸ノ口堰と洞門

不動川を渡河する
戸ノ口堰の水道橋

江戸時代の
「十六橋」石柱

猪苗代湖、戸ノ口堰の取入れ口にある十六橋。戊辰戦争の激戦地。郡山の開拓に貢献した安積疎水の水位調整をしている。

飯盛山洞門入口

飯盛山洞門内部

白虎隊が出て来た
飯盛山洞門出口

飯盛山北側の戸ノ口堰近くにある飯盛山開祖・常陸坊の墓。室町時代の供養碑

戸ノ口堰は、猪苗代湖の戸ノ口の十六橋から引かれた全長三十一キロの堰で、蒲生忠郷（たださと）時代の元和九年（一六二三）に着工され、当初は八田野（はったの）堰と呼ばれていました。しかし、寛永三年（一六二六）『八田家文書』によると、忠郷が将軍と上洛することになり、財政が圧迫されたため工事は一時中止となります。そこで八田野村肝煎（きもいり）の渡部内蔵之助（くらのすけ）（後に堰完成の功績から渡部から八田と改姓）は、私財を投じ工事を引継、二万人余を動員して工事を継続して約三五〇〇メートルを掘削したのですが財力が尽きて、またもや工事は中断したのです。寛永九年（一六三二）の加藤嘉明時代には、堤佐太夫と一柳清四郎の二人が喜明より工事の再開を命じられ、寛永十八年（一六四一）に八田野村まで、幅約三メートル、深さ約一.七メートルで完成したのです。

明暦三年（一六五七）には、新田開発のため水路延長工事が始まり、大野原から八田野堰の掘削が開始され、元禄六年（一六九三）には、一箕の北滝沢村の古川惣治衛門の進言により若松城下までの延伸が決まります。小池金右衛門が奉行となり工事は進められ、この時から戸ノ口堰と呼ばれるようになります。

天保六年（一八三五）には、八代松平容敬（かたたか）と家老の西郷頼母（たのも）の命により、堰の改修が始まり、会津藩士佐藤豊助（とよすけ）の指導で進められました。

天保八年（一八三七）難関だった飯盛山洞門が慮側から夜間提灯で測量し、工事か進められますが、湾曲して掘られたことからうまく噛み合わないでずれたことから、中間部分は堀直されてようやく貫通したのです。延べ約五万五千人が動員されています。洞門の長さは八十間余（一四五メートル）ありました。

現在は、崩落などにより掘り直され、昭和五十九年に改修されて一七九.九四メートル、高さ一.七メートルから一.八メートル、幅一.八メートルとなっています。

戊辰戦争の一八六八年八月二十三日、戸ノ口原で戦い敗れた白虎隊士は、城に帰ろうとして飯盛山の北に出たところ、滝沢峠下で西軍と遭遇し銃撃戦となり、負傷者が出たため飯盛山頂への避難を断念し、洞門に入ったことで知られています。その後、白虎隊士は飯盛山中腹で午前十一時頃自刃します。

現在でも会津若松市の大切な用水として使用され、国名勝の松平氏庭園、若松城の堀に使用され、さらには会津若松市市街地郊外北西側の水田一八六五ヘクタールを潤しています。

明治二十四年には、戸ノ口堰用水普通水利組合が設立され、現在では戸ノ口堰土地改良区が管理しています。

図・写真・文　©石田明夫2016　問合せ　TEL・Fax 0242-24-3423　090-1378-8087
メール・ホームページ「考古学から見た会津の歴史」で検索。